

いてふ屋資料について

この「いてふ屋資料」と名付けられた282点の資料は、平成8年12月、当館へ寄贈されたものである。

いてふ屋（銀杏屋）は、古くは承応年中（1650年頃）すでに鉾持村に御縄請けの地を所持していたという記録があるが、その後、寛文の頃（1660年代）から鍛冶屋・作左衛門と名乗って勢利町に住み、内藤侯が高遠領に入部した頃には、勢利町の丁代を勤めており、代々鍛冶職を家業としていた。

元禄13年頃、鉾持町に家屋敷を求めて移り住み、享保（1720年代）以後、代々鉾持町丁代を勤め、二代目銀杏屋・宗八は御本丸御門の御金物細工に従事しその功により白壁御免となった。四代・十三郎は寛政7年（1795年）御領分中四職人目付を仰付けられ、五代・宗八も同目付と御細工御用達を兼ね、六代十三郎も又、維新の頃明治の新政府から鉄砲職目付に任じられている。

したがって、「いてふ屋資料」の主なるものは、鉾持町丁代として関わった町方関係文書と、四職人目付として関わった職人関係文書とであるが、鉾持神社の祭礼の屋台狂言に関する文書なども興味深いものである。二百年余の歳月を越えて、大切に保存されてきた、これらの文書から、私達は町に住む普通の人々の身の回りに起こる種々の出来事やその処理の仕組みなどを知り、江戸時代後期の高遠町の様子や、そこに住んでいた人達の暮らしと、その心情を理解する手掛かりを得ていきたいものである。

平成9年2月

高遠町図書館